# 一・伝教大師最澄と瑠璃山東圓寺の創建

## 【開基】

伊賀薬師堂が現存する場所には、元々瑠璃山東圓寺と称した広大な伽藍を有する寺院が創建されていました。薬師堂自体は伽藍の一角をなす堂宇であったと考えられますが、江戸時代に別当（住持）を務めた山本院（江上家）家蔵の縁起書（以下、「縁起」）によれば、『西海道筑之前州、糟屋郡戸原邑、醫加安座。元由者、曩時丁人皇五十代、桓武聖朝、延暦乙酉暦祀、本朝天台列祖傳教大師入唐帰朝之日、同郡立華邑経営精舎、名独鈷寺暫留、彼地而為利益衆生彫刻醫王如来尊容二軀、一躰安独鈷寺、一躰設醫王如来闡提加被之霊地、安置之。「醫－醫王、加－加護之義、醫王加護之略言也」東圓寺之尊容是也。』と伝えられています。

この文について大川村郷土史で長 朗氏は次のように解釈を示しました。

一：延暦二四年（八〇五）、入唐していた最澄が帰朝した際、立華（花）村（現新宮町）独鈷寺に留まり、薬師如来像を二躯製作し、独鈷寺と東圓寺にそれぞれ安置したこと。

二：現在呼称する「伊賀」の地名は「醫加」が正当であること。

これら二点から、最澄作の薬師如来像を当地に勧請し、寺院の建立を行ったことが契機となったことが分かります。

年代については、「独鈷寺に暫く留まり、彼地において彫刻した」（意訳）とありますが、建立を具体的に指し示す年代等の記述はありません。

【写真１】 現在の独鈷寺の境内

## 「遣唐使最澄の動向と建立年代」

伊賀薬師堂では、地元口伝によって大同三年（八〇八）を創建年代とし、記念祭事を行ってきた経緯があります。明治四一年（一九〇八）四月七日～九日にも、盛大な「薬師如来壱千百年御遠祭」が挙行されています。ここでは、最澄の動向と創建年代について少し触れておきます。

最澄は、比叡山東麓で天平神護二年（七六六）（註1）に誕生し、幼名を広野（ひろの）と命名されています。伯父の紹介で奈良大安寺の仏門に入り、得度して最澄と改名しました。仏教界での活躍が期待された最澄でしたが、奈良仏教（南都仏教）を嫌い、比叡山で法華経を中心とした天台典籍を熱心に研究する日々を過ごしているようです。時折しも、当時の桓武天皇が平安京建設に動いた時期、或るいは新時代の国家仏教を模索していた時期と重なり、最澄・空海に新国家仏教を託すことになりました。両者ともに入唐求法（にゅうとうぐほう）を懇願し、最澄は短期の還学生（げんがくしょう）として認められ、遣唐使船に随行することになります。しかし、乗船した船が遭難に遭うなど、一年以上の九州滞在を余儀なくされ、延暦二三年（八〇四）に懇願であった入唐を果たします。天台宗の教義を得た最澄は、翌年（八〇五）に帰朝の途に着き、五月十九日に明州を出港し、六月五日に対馬着。伝承によるとその後、花鶴か浜（現古賀市）に到着し、京への帰路に着いたことになっています。新宮町誌では糟屋郡での滞在は、帰朝後の記録からも二・三日であったのではないかとの指摘がなされています。

東圓寺縁起では、最澄帰朝の際、逗留して薬師如来像を彫刻しています。しかし、滞在日数から考えても無理（註2）があると考えられることから、事前に造仏していたものを安置したか、或るいは、帰朝途路（船上など）で製作を行い、上陸後分与した可能性も残されています。また、最澄の帰朝は延暦二四年（八〇五）であり、地元口伝として伝える大同三年（八〇八）とは誤差を生じることになります。

しかし、東圓寺八〇八年建立説の背景には、御仏勧請を受け、東圓寺造営に至った場合、当然ながら長期間の年月を費やしたと考えられますので、建立までに約三年の期間を要したと見る方が妥当だと言えます。このようにして創建を果たした東圓寺はその後繁栄の道を辿ることとなりました。

【写真２】 独鈷寺所蔵の伝教大師像（わたしたちの町新宮より）
なお、掲載にあたっては独鈷寺と新宮町教育委員会にご配慮いただきました。

（註1）
最澄の誕生由来は「国府牒・度牒・戒牒」（京都大原来迎院蔵）天平神護二年（七六六）、「伝教大師和讃」では、神護景雲元年（七六七）の二説があり、ここでは、前者を採用している。

（註2）
遣唐使船遭難による九州滞在を余儀なくされた最澄は、九州各地で造仏伝承を残した。竈門山寺で造ったとされる筑前七仏などは代表的な例である。その多くが薬師仏で、この観点から言えば、薬師仏の造仏には長けていた側面が見え隠れし、無理とする根拠にはならないと解釈できるが、仏像自体が最澄作とする信憑性、或いは製作年代に齟齬を来している例が多く見受けられるため、より慎重な調査が必要である。